

併し唐初に於ては、既に佛典などが次第に印刷されたであらうと想像される。これに就いては未だ的確な證左を擧げることはい出来ないけれども、前後の情勢から推して大なる誤はなからうと信ずる。唐代の印刷物として遺品の今日に存する最古のものは、西曆一九〇八年に英國のスタインが敦煌から發掘し、現に大英博物館に收藏されてゐる金剛般若波羅密經である。その刊記によれば唐の懿宗の咸通九年（八六八）四月十三日王价なるものが、開版普施したもので、我が無垢淨光陀羅尼の開版に後るゝこと九十八年である。けれども無垢淨光陀羅尼に比ぶれば、十數倍の長い經典で、卷頭には祇園精舍に於ける釋迦說法の圖を刻出し、文字の秀美にして印刷の鮮明なる、到底同日の論ではない。必ずや相當の年月と幾多の經驗を積まねばならぬ。されば今日に發見されてゐる中國印刷物としては、この經典以前に溯することは出来ないけれども、中國印刷法の創始は、更に更に遠く溯り得るであらうといふことは、何人にも想像し得られるであらう。のみならず唐末に至つては、比較的需要の多い字書・小學の類まで雕板印行されたことは、北宋の末に出た翰林學士葉夢得（石林居士と號す）の石林燕語卷八に、

世言雕板印書始於漫道、此不然、但藍本五經板道爲之爾、柳玭訓序言、其在蜀時、嘗閱書肆云、字書小學率雕板印紙則唐固有之矣、

文中に見えた柳玭訓は、宋の晁公武の郡齋讀書志や明の葉盛の文淵閣書目にも著録されてゐる書籍である。さうして柳玭は唐の僖宗時代の人で、彼が蜀にあつて目睹したところを記したのであるから、當時蜀にあつては、字書、小學などは率ね雕板印行されてゐたことは確實な事實であるといはねばならない。

かくの如く中國の印刷法は、唐初の頃に創始され、その中葉以後は可なり盛んに行はれたであらうと想像される。さうして一方日唐間の交通、文化交渉の密接な狀態を考へるに、我が奈良朝の印刷法は、唐から傳來したも

のであらうといふ推測は、最も自然な妥當な考へ方であると思ふ。日唐交通上最も重要なものは遣唐使の派遣であるが、遣唐使は舒明天皇の二年に遣されたのを始とし、無垢淨光陀羅尼の開版された稱徳天皇の御代に至るまで、既に十回も派遣されてゐる。さうしてその都度多くの學生・學問僧を留學せしめたことは、既に述べた通りで、而も彼等の留學期間は十年・二十年の久しきに及び、學問僧は主として長安や洛陽の諸大寺に掛錫し、學生は國子監に屬する六學館のいづれかに入學して、佛教なり、儒學なり、文學なり、律令なり、それぞれ志すところを究めたものである。されば彼等が留學中、唐に於ける印書に全く無關心であつたらうとは考へ難い。さうして彼等は歸朝に際して多くの典籍を將來したことも、既に前節に述べた通りであるが、入唐八家の一人である宗叡の書寫請來法門等目錄に、

西川印子唐韻一部五卷

同印子玉篇一部卅卷

右雜書等雖非法門世者所要也、大唐咸通六年從六月迄十月、於長安城右街西明寺、日本留學僧圓載法師院求寫雜法門等目錄具如右也、日本貞觀七年十一月十二日却來左京東寺重勘定、入唐請益僧大法師位爲後記之、

とある。これによれば仁明天皇の承和五年（八三八）圓仁・圓行・常曉等と共に遣唐使に隨つて入唐した圓載は、唐の咸通六年（八六五）長安の西明寺にあつて、種々の典籍を書寫蒐集したが、その中に印書唐韻五卷・玉篇三十卷があつたことが知られる。これによつて考ふるに、奈良朝の遣唐學生や學問僧の齎した典籍中にも、印書の含まれてゐたといふことは、あり得べきことといはねばならぬ。殊に奈良朝に於ける殆ど總べての文化が、いづれ

も唐代文化の影響を受けて發達した事實から類推するに、印刷法も亦遣唐學生・學問僧などによつて、唐から傳へられたものであらうと推測を下すも敢て不當ではないであらう。たと現在に於ては、未だ斷言し得るほどの適確な證據を擧げることが出来ないまでもある。

- (1) 明治四十一年平子尙氏の報告するところによるに、現存する小塔は四萬三千九百三十基、その他に組立塔十數基、節塔二基あるが、殆ど毀損して完全なものは、僅に三百餘基に過ぎぬ。同年美術工藝乙種として國寶に編入されたものは、小塔百基、十萬節塔一基、一萬節塔一基、合せて百二基である。
- (2) 活字版説はその文字にやゝ傾斜したものであるからといふのであるが、これは探るに足らぬ説である。何となれば活字版に於ては、同一の文字は必ず字形が齊しくなくてはならぬ筈であるのに、數本を比較するに字形が異つてゐるからである。本版説は黒川眞頼氏の「日本書籍刊考」で、朝倉龜三氏の「日本古刻書史」はこの説に基いたものである。銅版説は藤井貞幹の唱へたところで、近藤正齋の古文故事餘錄に見えてゐる。平子鐸嶺氏の「百萬小塔肆攷」、大尾徳城氏の「寧樂刊經史」等もこの説をなしてゐる。
- (3) 後漢書靈帝紀、同儒林傳
- (4) 後魏書江式傳。晉書衛恒傳
- (5) 市村瓚次郎博士「寫本時代と板本時代に於ける支那書籍の存亡聚散」(史學雜誌第十三編第一・三號)
- (6) 中國雕版源流考によるに、近年江陵の某氏の藏書中に、開元雜報の殘簡が七葉發見されたが、これは唐代の雕本であるといふ。若し事實ならば、現存中國印刷物中最古のものであるが、未だ信すべき専門家の考説がないから遽に信じ難い。

第五章 歸化唐人・印度人・西域人と文化の移植

一、歸化唐人と文化的影響

遣唐使の往復につれて、唐人を始め印度人・西域人の我が國に歸化する者多く、それ等の人々が唐の文化は勿論、印度系イラン系の文化をも移植したことは、甚だ興味あることである。

遣唐使の歸朝に際して、唐朝は外交上の儀禮として特に送使をして送らしむることがあつた。⁽¹⁾天智天皇六年十一月遣唐副使坂合部石積等の歸朝に際して、司馬法聰をして送らしめ、⁽²⁾淳仁天皇天平寶字五年八月迎入唐大使高元度等の歸朝に際して、沈惟岳・陸張什等三十九人をして送らしめ、⁽³⁾光仁天皇寶龜九年十月持節副使小野石根の歸朝に際して、趙寶英・孫興進等數十人をして送らしめたが如きこれである。彼等は使命を果せば、直に本國に歸還すべきであるが、中には渡海の機を失ひ、遂に日本に歸化したものも少くない。⁽⁴⁾沈惟岳の如きは永く日本に歸化し、從五位に敍せられ、清海宿禰の姓を賜ひ、美作權掾に任ぜられてゐる。⁽⁵⁾この他續記に見えた袁晋卿(清村宿禰)・李元環・皇甫東朝・皇甫昇女・晏子欽(榮山忌寸)・徐公卿(榮山忌寸)・孟惠芝(嵩山忌寸)・張道光(崇山忌寸)・吾稅兒(永國忌寸)・盧如津(清川忌寸)・王維倩(榮山忌寸)・朱政(榮山忌寸)・王希逸(江田忌寸)後紀に見えた李法琬・清川忌寸斯麻呂(續記の盧如津と同一人か)・榮山忌寸千島・榮山忌寸諸依(この二人は續記の晏子欽・徐公卿・王維倩・朱政の四人のうちいづれかと同一人か)・清根忌寸松山の如き、いづれも歸化人で、夫々姓